

自分の考えや思いをもち、表現できる子どもの育成
～探究的な学習を通して、自分の考えを形成する～

大阪市立依羅小学校 研究推進委員会

1. 研究主題設定の理由

本校は昨年度、各教科を通した思考力の育成を目指して、思考ツールの使い方を習得し、考える方法、伝える手がかりを手に入れることで、生活や学習の場で自分の考えや思いを主体的に表現できるよう取り組んできた。これにより、学習課題に対して、集めた情報や自分の考えなど頭の中にあるイメージを付箋などを書いて可視化し、思考ツールに沿って操作することで、情報や考えを整理・分析することができた。思考ツールを活用し考えを明確にすることで、自分の考えに自信をもつことができ、積極的に話し合い活動に取り組む姿が多く見られた。

しかし、思考ツールを使って考えや情報を整理・分析することはできたが、そこから自分の考えや意見をまとめて表現していくことが難しい、どうやっていいのかが分かっていない子どもの姿が見られた。また、子どもたちの発達段階や学習内容における思考スキルに応じた思考ツールをうまく活用できなかつたり、思考スキルを意識した指導計画を立てられていなかったりと、指導者側の課題も見えてきた。

そこで、今年度は、子どもの発達段階や学習内容に合ったより効果的な「思考ツール」の活用の仕方を探り、低・中・高学年の3段階に分けて、その段階に応じた思考ツールを取り扱うようにした。また新たに「ルーブリック」に取り組み、各授業の中で、評価基準の見える授業構成で、子どもたちが学習のめあてに対する具体的な行動目標をもって学習に取り組むことできる上に、自らの学びを振り返ることができ、より高い段階を目指して意欲的に学ぶことができるからである。そして、研究教科を生活科・総合的な学習の時間とし、探究的な学習を主体的に、創造的に進めることで、児童にとって楽しく、してよかったと思える言語活動になっているかを目指すことにした。

2. 研究の趣旨

今年度の研究テーマの中で、サブテーマを「探究的な学習を通して、自分の考えを形成する」とした。これは、子どもたちが、各思考の中で効果的な思考ツールの使い方を模索したり、地域の中で面白いと思う素材を探したりすることで、より探究的な学習を通して、自分の考えを形成するよう図っていく。思考ツールは、7つに絞り、低学年・中学年・高学年で分けることにした。さらに、思考ツールを7つに絞るだけではなく、それまでに使用してきた思考ツールを各思考に応じて子どもたち自身が自ら使えるように目標設定した。

7つの思考ツール	
低学年	ベン図・X/Y/Wチャート・イメージマップ・ピラミッドチャート
中学年	くま手チャート・同心円チャート・PMIチャート 低学年で使用した思考ツールを自分たちで選択し、使用する。
高学年	7つの思考ツールを自分たちで選択し、使用する。

3. 研究の概要

視点① 子どもが主体的に学べる学習形態の工夫

- 自力活動や協同的な活動の場が設定されている単元構成になっているか。
- 児童が考えや思いを発信することが主体的に行われているか。
- 児童にとって楽しく、してよかったと思える言語活動になっているか。
- 様々な学習形態に対する適切な指導があるか。

視点② 思考力を身につけるための思考ツール・ルーブリックの在り方

- 思考力を育てるのにふさわしい言語活動を設定したか。
- 児童の発達段階、学習内容に応じた思考ツールを選定しているか。
- 思考ツールを活用することで、自分の考えを明らかにすることができたのか。
- 評価基準の見える授業構成になっているか。

視点③ 学習習慣の基礎・基本や言語力を身につけさせるための工夫

- 発言・挙手ルール、聞き方・話し方、声の出し方、話し合い方など
- 読書タイム…読書貯金通帳の活用、目標の設定（クラスで○ページや○冊）、読んだ本の中からおすすめ紹介など

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 使う思考ツールを7つに絞り、その7つの思考ツールを低学年・中学年・高学年の発達段階で分けたことで、各思考スキルに対してより効果的な思考をすることができた。
- 思考ツールを活用し考えを明確にすることで、これまで話し合いに参加しにくい児童も、自信をもって話し合い活動に参加することができた。
- 話し合い活動が積極的になったことで、友だちどうしの学び合いにつながり、結果として一人一人の深い学びへとつながっていった。
- ルーブリックにより、評価基準を学級全体で共有したことで、より意欲的に学習に取り組むことができた。

(2) 今後の課題

- 生活科・総合的な学習の時間だけではなく、横断的にその他の教科等でも思考ツールを使う頻度を増やしていく。
- ルーブリックの判断基準をより明確にもつ。指導者が総合的な学習の時間における評価規準が曖昧にならないようにめあてをはっきりもち、「この学習では何をどうしたらよいのか。」評価基準を設定するようにする。
- 生活科・総合的な学習の時間における年間カリキュラムを学校全体で見直し、新たに活用できる地域の素材を探す。